

研究活動

武内孝善

No.	著書、学術論文等の名称	単著 共著	発行又 は発表 の年月	発行所、発表雑誌又 は発表学会等の名称	業績の概要	該当頁数
1	【著書・編著・監修】 『寛平法皇御作次第集成』	単著	1997. 2 (平成9年2月)	東方出版	密教では実践部門を事相、または秘密事相というが、この分野では師から弟子への伝承が重要視され、科学的な研究方法はいまだ確立されていない。学術的に比較研究する上で、成立年代が確かな基準となりうる史料の発掘がなされるべきだと考えていたとき、宇多天皇(867~931・のち寛平法皇と称される)自筆の作法次第の存在を知った。本じめ、法皇作と認められる十八道次第・金剛界次第(2種)・胎藏界次第(2種)・三昧耶戒式・灌頂次第(3種)の計9本の翻刻・校訂本文と自筆本の影印、それに解説を収録した。今後、事相を科学的に研究していく上での基本史料を提示できたと自負している。	664頁
2	『高野山から弥勒の世界へ —弘法大師の生涯と 高野山—』	単著	2000. 8 (平成12年8月)	高野山大学	第1章「空海の出自」では、空海の出た讃岐の佐伯直氏は斜陽・没落の一族とのイメージでとらえられてきたが、信頼できる史料の分析から強力な経済力をもっていたことが判明。その要因の解明から、全く疑わされることのなかった空海の讃岐国誕生説は見直されるべきことを指摘。第2章「空海と密教との出会い」では、空海の入唐の動機・目的について、従来の説を一つ一つ検証・批判するとともに、その端緒が若き日の求聞持法による神秘体験にあることを論じた。第3章「空海と最澄との交友」では、従来、二人の決別を弘仁7年(816)ころとみる説が有力だったが、二人が取り交わした手紙の分析から、すでに弘仁3年末から同4年初めの段階で、両者のあいだに埋めることのできない大きな溝ができていたことを指摘した。第4章「高野山の開創と伝説」では、従来、開創を神秘化する單なる伝説とされてきた①丹生津比売命からの高野山譲渡説、②飛行三鉢の話を取上げ、空海の文章の分析から、ある真実を踏まえて創作されたことを指摘するとともに、空海に関する伝説・伝承と史実との関係についてふれた。	220頁
3	『弘法大師空海の研究』	単著	2006. 2 (平成18年2月)	吉川弘文館	今回、博士学位請求論文として提出した論文集である。空海の前半生に関する十篇の論考を四部に分かって収録した。参考までに、四部の名称を記しておく。第一部 空海の誕生年次と家系、第二部 空海の入唐求法、第三部 最澄との交友と訣別、第四部 高野山の開創。	
4	『あなただけの弘法大師 空海』	共著	2001. 12 (平成13年12月)	小学館 立松和平氏と共に著	立松和平氏との共著。現存最古の地蔵院本『高野大師行状図画』から絵を借り、その絵にまつわる物語りを詞書をベースに平易な文章でつづる(立松氏)とともに、学術的な解説(武内担当)を付した。また、巻末に学術的に信頼できる空海伝と年譜・空海名言名句抄(武内担当)を付した大人向けの絵本。	126頁

5	『『三僧記類聚』に関する総合的研究』	編著	2002. 3 (平成14年3月)	科研費出版	武内を研究代表とする8名で行なってきた3年間の研究成果をまとめた報告書。10本の論考と2本の本文校訂文からなるが、その約八割を武内が執筆。	390頁
6	『高野大師行状図画 CD-ROM版 －親王院十巻本－』	編著	2003. 5 (平成15年5月)	小林写真工業	高野山親王院蔵の『高野大師行状図画』十巻本を拡大・縮小が自由自在にでき、画面上で詞書の翻刻文・場面解説文を絵と同時に閲覧できる機能を付してCD-ROMにした。画面の拡大・縮小などの技術的な機能はその専門家にまかせたが、なかに収録した本文の翻刻文・場面解説などのデータは武内が担当。これには別に、66頁からなる冊子解説「『高野大師行状図画』の世界－親王院本をめぐって－」(武内担当)を付す。	解説66頁
7	『弘法大師空海の寺を歩く』 (古寺巡礼10)	編著	2007. 4 (平成19年4月)	JTBパブリッシング	空海の生涯とその教えを説きつつ、高野山を中心として空海がかかわりをもつた寺からを紹介したもので、ガイドブックを兼ねた本である。「空海のことばと世界」「空海の生涯」「真言宗とは」を執筆し、全体を監修した。	
8	「詳細 後宇多法皇宸翰御手印遺告」(後宇多法皇入山700年記念)	単著	2007. 10 (平成19年10月)	大本山大覚寺	後宇多法皇の大覚寺ご入山700年を記念する事業の一環として、後宇多法皇が最晩年に空海の『御遺告』に倣って執筆された『後宇多法皇宸翰御手印遺告』の訓読文と現代語訳、それに解題、後宇多法皇・大覚寺関係文献目録を付したものである。後宇多法皇は、幼少のころから護摩や論議のまね事をして遊んだと記されるように、早くから密教に興味をいだいていたようで、徳治三年(一三〇七)七月、皇后が崩御したのを契機として正式に出家し、その後は空海に対する熱烈な信仰に生きたのであった。後宇多法皇のご生涯、および大覚寺に関する根本史料の一つを、このような形で刊行できたことを嬉しく思うとともに、多くの方に読んでいただきたいと考える。	
9	『弘法大師 伝承と史実 一絵伝を読み解く－』	単著	2008. 7 (平成20年7月)	朱鷺書房	空海ほど伝記の多い人物はいない、といわれる。特に、空海が閉眼されてから時代が下るにしたがって、それらの伝記には荒唐無稽とも想われる奇跡譚の類が多くみられるようになる。それらの奇跡譚を想像力たくましく絵画でもって表わしたのが『弘法大師行状絵巻』であり『高野大師行状図画』であった。そこには、宗教的な偉人は常人を超えた能力をもつた人物として表現されているけれども、その裏には宗教的な真理が隠されている。『行状絵巻』『行状図画』をひもとく楽しみの一つは、それらの背後に隠された歴史的な真実・宗教的な真理を探索することである、といえる。本書では、五種類ある弘法大師行状絵巻のうち、九十二場面ともっとも場面数の多い『高野大師行状図画』十巻をもちいて、絵巻物の世界を楽しんでいただくとともに、その裏にかくされている歴史的真実の世界、および一つ一つの場面が何を云わんとしているのか、といった宗教的真理の世界を覗いてみようとしたものである。本書は六章からなる。「誕生と若き日の修行」「入唐求法」「大師の書とその靈異」「高野山の開創」「入定信仰」の五つの章では、合計五十の場面をとりあげて解説を加え、かつ人口に膾炙する特色ある伝承・伝説について、また、中空の内蔵をもつた	

10	『御宝号とその念誦の歴史』	単著 2009. 9 (平成21年9月)	四季社	その裏にかくされた真実・真理の解明をこころみた。さいごに、「大師伝説と絵伝の成立」の章をもうけ、空海の事蹟にたいする伝説化・伝承化がいつごろからはじまるのかを考え、ついで「弘法大師行状絵巻」はいつ成立したのか、伝存する諸本の系統と伝本、そして本書でみていただく親王院本『高野大師行状図画』の位置とその特色を記した。 いまだ絵巻物の世界を十分に理解しているとは言いがたいけれども、伝承と史実のあいだを行きつ戻りつしながら、中世の人々が空海に期待したものを見取っていただき、絵巻物の世界の奥深さを味わっていただけたならば、望外の喜びである。	14頁
11	『遣唐使船の時代 —時空を駆けた超人たち—』 (角川選書479)	共著 2010. 10 (平成22年10月)	角川学芸出版	御宝号とは、空海を信仰の対象として唱える「南無大師遍照金剛」(八字の宝号)または「南無遍照金剛」(六字の宝号)をいうが、これらの宝号はいつから唱えられるようになつたのかについては、いまだ明確にされていない。「大師行法」などの作法次第に「大師宝号 千遍」などと記されることが散見されることから、作法次第を中心に戸籍を蒐集してきた結果をまとめたものである。従来は、ご宝号の始原を平安時代まで遡らせる見解はみられなかったけれども、法会の場では少なくとも平安時代末期の12世紀はじめまで遡ることが明らかとなった。ご宝号念誦がいつからはじまつたかについては、本書が一番詳しいものと自負している。	235頁中 148～175頁 を担当
12	『空海 人生の言葉』	2010. 12 (平成22年12月)	デイスカヴァー・トゥエンティワン	武内孝善監修・川辺秀美編訳	202頁
13	『高野山大学附属購入典籍 図書館・文書目録』	単著 2011. 3 (平成23年3月)	高野山大学図書館	武内孝善編著	732頁
14	空海と密教美術	共著 2011. 7	洋泉社	川辺秀美氏との共著	206頁
1	【学術論文】 Guhyasamāja - tantraの漢訳 年代	単著 1975. 3 (昭和50年3月)	『印度学仏教学研究』 23-2 [通46] 日本印度学仏教学会	インド後期密教の根本聖典の一つ Guhyasamāja - tantra(秘密集会タントラ)の 漢訳年代には、従来2説あった。典拠が示さ れていない大中祥符4年(1011)が正しいこと を、訳経録『大中祥符法宝録』の分析を を通して論証した。	2頁
2	宋代翻訳經典の特色について 附・宋代翻訳經典編年目録	単著 1976. 2 (昭和51年2月)	『密教文化』113号 密教研究会	中国における翻訳事業は、宋代に最後の輝 きをみせた。『大中祥符法宝録』『天聖积	27頁

				経総録』『景祐新修法寶録』によると、太平興國7年(982)からの56年間に、263部573巻の經典が訳出された。これら大量の訳出經典の特色を、①いかなる方針のもとに訳經事業はなされたか、②訳出經典の数量と所属(分類)からみた特徴、③原典(梵本)別にみた訳出經典の特徴、の3点から分析した。あわせて56年間に訳出された經典の編年目録を収録した。		
3	施護伝考	単著	1976. 3 (昭和51年3月)	『印度学仏教学研究』 24-2 [通48]	宋代の代表的な翻訳者の一人・施護の中国における足跡を、『大中祥符法寶録』『天聖釈經総録』『景祐新修法寶録』の記述を中心に論じた。從来の説の誤謬をただすとともに、示寂の年をはじめ、いくつかの新しい事跡を紹介した。	4頁
4	十住心思想の成立過程について	単著	1978. 3 (昭和53年3月)	『密教学研究』10号 日本密教学会	空海の代表的な思想の一つである十住心思想は、天長7年(830)ころに撰述された『秘密曼茶羅十住心論』十巻、『秘藏宝鑑』三巻によって集成大成されたとみるのが通説である。しかし、空海の著作をよくよく見てみると、空海当時の諸宗教を比較対比する文章は、弘仁6年(815)ころから見出される。これらがやがて十住心思想として結実したと考え、諸宗教を比較対比する文章をすべて抽出して年代順に並べ、その成立過程を論じるとともに、なぜ弘仁6年ころにこのような豎(たて)の教判を提示しなければならなかつたのか、を論じた。私は、最澄との交友・決別がその契機になったと考える。	34頁
5	『般若心經秘鍵』撰述年代考	単著	1978. 5 (昭和53年5月)	『高野山史研究』2号 高野山史研究会	『般若心經』は、古來、600巻からなる『大般若經』の精髄を集めたものと解されてきたが、空海は大般若菩薩の大心真言を説いた奥深い密教の經典であるとの密教的解釈を施されたのがこの『秘鍵』である。本書の成立年代には2説あり、空海最晩年の承和元年(834)とみなす説が有力視されてきたが、史料的には根拠が薄弱であって支持できない。この書には、繰る返し繰り返し十住心思想に繋がる豎(たて)の教判思想がみられ、この十住心思想を物差しとすると、弘仁から天長にかけて(820~5)成立したのではないか、と推論した。	16頁
6	弘法大師をめぐる人々 (一) —広智—	単著	1980. 9 (昭和55年9月)	『密教文化』131号	空海から書簡ならびに「十喻の詩」を贈られた「広智禪師」なる僧がいる。その人物比定においては三説あって、どこの誰かは不明瞭であった。弘仁6年(815)6月に書写された高山寺蔵『金剛頂經』奥書の分析を通して、この「広智禪師」とは鑑真から「持戒第一」と称された道忠の弟子で、人々から「菩薩」と親しく呼ばれ、下野国大慈院に住していた「広智菩薩」その人であることが明らかとなった。あわせて、彼の経歴、および空海が彼を知るにいたった経路についても考察を加えた。その結果、比叡山寺で最澄から「三部三昧耶の灌頂」を受法するなど、天台教団との結びつきが極めて強い僧であることが判明した。	26頁
7	弘法大師伝をめぐる諸問題 (一) (一) —誕生年次—	単著	1982. 2 (昭和57年2月)	『高野山大学論叢』 17号	空海の生年は、古來、宝亀5年(774)とみなされてきた。しかるに近年、『続日本後紀』承和2年(835)3月25日条の「空海卒伝」にもとづく宝亀4年(773)説が提唱され、追隨する人が少なくなかった。しかし、それらの	35頁

8	理明房興然伝攷 －理明房興然伝記編年史料集－	単著	1983. 2 (昭和58年2月)	『高野山大学論叢』 18号	説は史料の取扱いかたに問題があり、かつ史料批判がまったくなされていないなど、信頼にたるものとは云いがたかった。空海自身が書いた文章中に、生年を知りうる「中寿感興詩」を見つけ出し、これにもとづいて、空海の生年は伝統的に信じられてきた宝亀5年で間違いないことを論証した。 鎌倉時代のはじめ、真言宗関係の図像集を集大成した僧に覚禪がいる。興然はこの覚禪の師にあたり、興然もまた『曼荼羅集』『五十巻鈔』『金剛界鈔』などいくつかの図像集を編纂している。これら図像集編纂の経緯を知る史料に、聖教の奥書類がある。それらの奥書を編年順に整理し、興然の著作活動の全貌解明を目指したのが本稿である。
9	弘法大師と法華講会 －「天長皇帝為中務卿親王講法華經願文」考－	単著	1983. 2 (昭和58年2月)	中川善教先生 頌徳記念論集 『仏教と文化』 東方出版	空海の漢詩文を集成した『性靈集』には、追善の仏事などの際に草された四十一篇の願文が収録されている。このなか、『法華經』が書写または講説されたときのものが七編見いだされる。その一つに、天長4年(827)9月、淳和天皇が施主となり、故為中務卿親王すなわち伊予親王のために、薬師三尊を造立し『法華經』を書写して四日間橘寺にて法華講会を修したときの願文がある。この講会には、僧綱に属する僧はもちろん、各宗の高徳がこぞって参加しており、尋常でないものが感じられる。それは、半年あまり頻発する地震とその原因を伊子親王母子の怨霊とみなす考えに起因することを解明するとともに、このときの講会が「法華八講」であったことを「法華八講」の定義づけから説きおこし、論証した。
10	越州の弘法大師	単著	1985. 3 (昭和60年3月)	『空海・長安への道』 同実行委員会	空海は大同元年(806)4月、足かけ3年におよぶ入唐求法からの帰途、中国・越州にて節度使に書を呈して、仏典だけでなく、人々に役立つものであれば詩・賦・碑・銘・卜・医・五明など種類を問わず、わが国にもち帰りたいので援助してほしいことを懇願された。このように越州は、唐都長安・福州とともに空海の足跡が確実にたどれる数少ない場所の一つである。そこで、806年当時の越州における仏教界の動向を、最澄の将来録の分析を通じて明らかにした。
11	弘法大師遺誠について	単著	1987. 3 (昭和62年3月)	『印度学仏教学研究』 35-2 [通70]	空海の著述にも差別的なことばがみられる、との指摘をうけて、空海の諸弟子への遺言とみなされてきた遺誠類を検討したところ、かつて一度も空海真撰が疑われたことのなかった弘仁四年(813)5月晦日の遺誠(弘仁遺誠)も、空海真撰とみなすことが難しくなってきた。そこで、①写本の残り方とその書写の形態、②空海の伝記類における扱い方の二方面から、空海真撰に疑義を呈した最初の論考である。
12	弘法大師をめぐる人々（二） －田少貳－	単著	1987. 3 (昭和62年3月)	『密教文化』158号	空海撰述の願文研究の第二弾。入唐求法から帰国直後の大同2年(807)2月九州・太宰府において、太宰少弐・田中朝臣の亡母の一周年忌法要を営んだときの願文を分析した。その結果、①空海の願文は四段形式からなること、②空海願文の原形をなすのがこの

13	高野山の開創とその意義 —弘法大師の生涯における 弘仁六・七年—	単著	1988. 3 (昭和63年3月)	『密教文化』162号	太宰少弐の願文であること、③「田少弐」の人物比定を行い、田中朝臣八月麻呂がその人であろうと推考されること、④『千手儀軌』の奥書から、この法会のとき空海が書写し田少弐に譲られた『千手儀軌』の数奇な伝頌関係が明らかになったこと、などを成果としてあげうる。
14	仁和寺の創立と寛平法皇	単著	1989. 3 (平成元年3月)	『印度学仏教研究』 37-2 [通74]	空海は弘仁7年(816)6月19日、嵯峨天皇に上表文を呈上して、高野山の下賜をお願いされた。この上表文の分析から、①高野山開創の目的、②高野山が伽藍建立地として撰ばれた理由などを導き出し、あわせて高野山の開創に着手した弘仁7年が空海の生涯にとって、極めて重要な位置を占めることを指摘した。つまり、帰朝してからちょうど十年目、機縁の熟するのを待って本格的な密教宣布活動を開始された空海は、弘仁6年には自ら請來した密教経論の書写を依頼し、翌7年には高野山上で伽藍の建立に着手した。この二つの活動をもって、わが国への密教の流布・定着を図られたのであった。
15	『理趣経』付加句の付加年代 について	単著	1990. 3 (平成2年3月)	『密教学研究』22号	空海の没後、真言宗は天台密教におされて劣勢であった。そのような真言宗の形勢挽回に多大の功績を残されたのが第59代の宇多天皇、のちの寛平法皇であった。仁和寺は從来、父帝・光孝天皇が建立に着手されたが完成をみないまま崩御されたので、宇多天皇が後をうけて完成され、父帝の一周年忌法要と同時に落慶供養を執り行なったとみなされてきた。しかるに、仁和寺の根本史料である年分度者が設置されたときの官符によると、光孝天皇陵のなかに寺を建てたある。そこで、①史料的にはこの官符こそ信頼すべきであること、②仁和寺が最初天台の寺として出発した理由、③宇多天皇はなぜ、即位後十年目に三十一歳の若さで十三歳の醍醐に位を譲り仁和寺に入られたのか、などを論じた。
16	『理趣経』付加句の付加年代 について	単著	1990. 3 (平成2年3月)	『密教学研究』22号	今日、真言宗をはじめ南都諸寺でも日常の勤行に不空訖『理趣経』が読誦されているが、不空訖そのままではない。つまり、最初に(1)「勧請句」、最後に(2)「合殺」・(3)「回向文」といった付加句と称されるものをそえて読誦している。從来、これらの付加句は(1)(2)(3)の順序で成立したとか、(2)の合殺は13世紀後半に南都において付加されたとかみなされていた。しかるに、古写経・「理趣三昧法則」を蒐集し整理した結果、古写経からは最初に(3)回向文があらわれ、ついで(2)合殺と(3)回向文を付したもののが、最後に(1)勧請句(2)合殺(3)回向文の三つが揃ったものがみられた。ついで「理趣三昧法則」類からは、すでに平安末期には法会の場で三つの付加句をして読誦されていたことが確認できた。これより、①三つの付加句はほぼ同時に付加されていたこと、②まず法会の場で付加して読誦され、ついで写経の場に徐々に取り込まれていったと考えた。
16	真然大徳の御事蹟①～⑫	単著	1989. 1 ～1991. 1 (平成元年1月～平成3年1月)	『高野山時報』 2517号～2581号	真然は、空海が計画した高野山の伽藍を完成させた僧として著名であるが、没年をはじめ、その生涯には不明な点が少なくない。そこで本稿では、真然の生涯をできるかぎり

17	真然大徳のご生涯	単著	1991. 3 (平成3年3月)	『曼荼羅ルネサンス』朝日新聞社 り一次史料にもとづいて再構築しようと試みた。また、史料批判を徹底的におこなった結果、多くの点で従来の説を訂正することができた。最後に一つだけ記すと、真然の事蹟は高野山が真言宗の中心となるべきである、との信念にすべて貫かれていたといえる。
18	弘法大師『弘仁遺誠』の真偽について—空海の即身成仏思想の成立過程よりみた—	単著	1991. 3 (平成3年3月)	『印度学仏教学研究』 39-2 [通78] 高野山の伽藍完成にその後半生をささげた真然の生涯を概観した。その前半生のクライマックスは、承和3年(836)5月、真言宗の請來を一身に背負い、留学僧として唐に向けて出発したときであった。しかし、博多津を出帆した翌日には嵐に遇い、二十三日間にわたる漂流のすえ南の島の人たちに助けられ、まさに九死に一生をえて博多に帰りついた。この挫折を乗りこえ、その後半生は高野山の伽藍完成にひたすら励まれたのであった。
19	『理趣経』付加句の付加句をめぐる諸問題（二）—合殺についての一史料—	単著	1991. 3 (平成3年3月)	『宗教研究』63-4 11でとりあげた『弘仁遺誠』の真偽を内容面から考察したのが本稿である。この遺誠には、「上上智觀はそれ即身成仏の徑路なり」と、「即身成仏」なる語が何の説明も付されない形でみられる。一方、空海の著作中から即身成仏思想を抽出し成立年代順にならべると、意外な結果がえられた。それは、空海がご自身のある思想をあらわすことばとして「即身成仏」を使用するのは限られた二・三の典籍だけで、しかも弘仁の末から天長にかけてのことであった。このことから、『弘仁遺誠』の空海真撰説は疑しいと考えるが、その作業過程で、はからずも空海における「即身成仏思想」の成立を考える上で重要な示唆がえられた。
20	目無し経『般若理趣経』の成立をめぐって	単著	1992. 3 (平成4年3月)	『密教学会報』31号 さきに『理趣経』付加句は、平安末期の12世紀中ころから法会の場で使用されていたことを明らかにしたが、本稿はその補遺である。鎌倉極初期に成立した『三僧記類聚』に、「『理趣経』の合殺のところで後鈴を振るべし」とあり、このことからも、すでに平安末期に付加句を付して『理趣経』を読誦していたことが確認できた。
21	興教大師と伝法大会	単著	1992. 12	『興教大師覚鑑研究』 写経料紙の全巻にわたって下絵として白描で源氏物語絵がえがかれており、その大部分の人物は輪郭のみで目・鼻などがえがかれていらない、つまり目(など)がないことから、「目無し経」と称されている一群の写経がある。その一本に『理趣経』があり、奥書には六人の人物—後白河法皇・某禪尼・静遍・成賢・僧正御房・深賢一の名がみられる。本稿では、これら六人のかかわりとこの『理趣経』が書写されるにいたった経緯について考察した。その結果、後白河法皇の崩御にちあつた勝賢は、かつて命運をともにした父通憲とその後妻朝子との御交友をしのぶとともに、法皇から下賜された白描の物語絵におもいしたり、三人の御菩提を弔わんがために付法の弟子たちに命じて書写させたのが、ほかでもない一群の「目無し経」であり、特に静遍と成賢の手によって書写されたのが『理趣経』一巻であったとの結論に達した。
				覚鑑は、真然大徳廟を取り込んだ形で大伝

	-真然大徳創始の高野山伝法会について-		(平成4年12月)	春秋社	法院を建立した。また真然が創始した高野山の伝法会を再興して伝法大会をおき、数学の振興につとめた。本稿では、なぜ新参者の覚鑓にこのようなことができたのかを考える上での根本問題、①高野山の伝法会は真然が創始したとみなしてよいか、②真然が創始したとすればその始修年次はいつであったか、の解明を目的とする。前者については、少なくとも覚鑓は真然が創始したことを堅く信じていたことがわかった。後者については、一方で寺領が成立し、また一方で高野山の伽藍建設に目途がついた貞觀18年(876)ころであったと考えた。その伝法会が廃絶したのは延喜の末のことであった、と覚鑓は記す。	
22	仁和寺真乗院第二世覚教僧正伝攷	単著	1993. 3 (平成5年3月)	『密教学会報』32号	覚教は、左大臣藤原実房の子で、真言宗の最高位である東寺一長者にまで登りつめた僧であり、また覚教が東寺長者をつとめていた延応2年(1240)、中世東寺の庶民信仰の核となった西院御影堂における二つの法会—御影供・舍利会—が始修されてるなど真言宗史の上からも注目すべき人物の一人である。彼が東寺一長者になりえたのは、その出自によることを指摘した。詳細な「覚教僧正年譜」と編年史料集を付した。	49頁
23	興教大師覚鑓と伝法大会 —覚鑓の高野登山の動機について—	単著	1993. 7 (平成5年7月)	宮坂宥勝博士 古稀記念論集 『インド学・密教学研究』 法藏館	覚鑓の高野登山の動機については、從来三説あったが、近年その一つの定尊阿闍梨に師事するためであったとする説が有力視されている。しかし、この説は基本的な史料の誤読にもとづくものであり、賛意を表することはできない。覚鑓本人が登山の動機を語っていないかを調べたところ、①『述懐詞』②保延2年(1136)6月日付の「金剛峯寺奏状案」③「請授法書状」の三つの史料を見いだした。これらによると、もともと入山の志をもっていた覚鑓は、空海と高野明神の度重なる冥告を契機として、成仏せんがために登山したことが判明した。	23頁
24	性靈集における毛人・羽人の問題について	単著	1993. 11 (平成5年11月)	『真言宗における人権啓発』 高野山真言宗	空海が差別的なことばを使用しているとの指摘のもとづき、特に東北地方に住んでいた毛人・羽人と称された人たちについて、空海の著作を精査した報告である。その結果、空海の毛人・羽人に対する見解は『日本書紀』によるものであり、しかも当時の人たちの理解を超えたものではありえないものであった。さらに、こちらが真心をもって接すれば友好関係が保たれることを強調しており、その背後には空海の博愛精神が読みとれる。	24頁
25	弘法大師をめぐる人々—紀氏一	単著	1993. 12 (平成5年12月)	『印度学仏教学研究』42-1 [通84]	空海は弘仁7年(816)6月から7月にかけて、高野山の開創に着手する。開創の工事をはじめに先立ち、紀州在住の有力者に援助を請われた手紙が残るが、その内容分析から、この手紙は丹生津比売命を祭祀していた丹生祝家、またはその本家筋にあたる紀直氏に出されたとみなしした。特に本稿は、空海の著作を手がかりに、空海と紀氏との係わりを明確にすることを目的としたが、結果は両者の関係を知りうる史料が以外に少ないことであった。また、從来の人物比定の誤謬をいくつか訂正することができた。	6頁
26	高野山の開創をめぐって	単著	1994. 8	岡田重精編	高野山は空海が丹生津比売命から譲渡され	213-247頁

	一弘法大師と丹生津比売命一	(平成6年8月)	『日本宗教への 視角』 東方出版	たとする説は、従来、高野山の開創を神秘化する伝承である、とみなされてきた。その理由は、空海がその著作で丹生・高野両明神にまったく触れていないことであった。はたしてそうであろうか。空海は弘仁7年(816)6月から高野山の開創に着手するが、工事をはじめるに先立ち、紀州在住の有力者に援助を請われた。そのときの手紙を分析すると、丹生津比売命を祭祀していた丹生祝家、またはその本家筋にあたる紀直氏に出されたことが明らかとなった。特に前者は、山麓の天野に住する人たちであり、地元の人たちの協力無くしては、空海といえども850メートルの山中に伽藍を建立することは不可能であったと考えると、俄然注目される。空海と丹生祝家、ひいては丹生津比売命とは開創当初から交渉をもち、物心両面から協力・援助をうけており、それらのことが核となって譲渡説が生まれたと、みなすに至った。	
27	五島美術館蔵『不空三藏表制集』の研究	単著 1994. 12 (平成6年12月)	『高野山大学密教文化研究所紀要』 8号	『不空三藏表制集』(以下、『表制集』)は、唐王朝に密教のもつ素晴らしいを認めさせ、唐の社会に密教を受容させた大功労者である不空三藏が皇帝に呈上した表と、それに基づいて皇帝が出した制勅類を集成した唐代密教を知る上での根本史料である。わが国へは空海が請來した。空海は、密教の精髄がこの『表制集』のなかに記されている、と帰国報告書に明記された。本稿では、現存する最古の写本である(平安初期写)五島美術館蔵本(石山寺旧蔵)を底本とし、東寺観智院本・高山寺本・高野山三宝院本を対校本として卷第六の本文校訂を行い、あわせて解説を付した。別に、卷第三は石山寺本を底本とした校訂本を作成済みである。 解題・校註	95-158頁
28	『三十帖策子』と高野山 —第1回中絶説の検討—	単著 1995. 3 (平成7年3月)	『宗教研究』 303号	高野山史をひもとくとき、必ずつぎのごとき記述を目にする。延喜16年(916)高野山は開創以来はじめて滅亡の危機を迎えた。それは『三十帖策子』をめぐる東寺との争いにより、座主無空が諸弟子を率いて高野山を離れたため、山上には住む僧もなく、急激にさびれてしまった。これを第一回の中絶という、と。はたしてこれは史実を伝えているのかとなれば、否である。上に記した話は18世紀はじめに成立した『高野春秋』にもとづく説であるが、真実を伝えているとは云いがたい。史料的には延喜19年(919)11月、觀賢が撰述した『三十帖策子勘文』こそが信頼に足るものといえる。これによると、無空はまたま『策子』をたずさえて下山していたとき示寂したのであり、住む僧がいなくなったとか、急激に寂れたとかといったことがなかった。したがって、第一回の中絶もありえなかった、と考える。	284-286頁
29	御遺告の成立過程について	単著 1995. 3 (平成7年3月)	『印度学仏教学研究』 43-2 [通86]	空海作と称される「御遺告」が四本伝存する。すなわち①『遺告二十五ヶ条』②『遺告諸弟子等』③『太政官符案并遺告』④『遺告真然大徳等』の四本である。これら四本の成立順序については、四つの説が存在する。私は、四本の本文を一語一句対照した結果、つぎの順序で成立したと考える。つまり、まず『二十五ヶ条』がはじめに成立	83-87頁

30	御手印縁起の成立年代について	単著	1995. 3 (平成7年3月)	『密教学研究』27号	し、ついで『諸弟子』が『二十五ヶ条』から抄出され、さらに『諸弟子』から『太政官符案』と『真然大徳』が抄出された、と。
31	天台宗伝来の『不空三蔵表制集』について	単著	1995. 12 (平成7年12月)	『高野山大学密教文化研究所紀要』9号	本稿では二つのことを考察した。第一は、広・狭二つの御手印縁起を設定したことである。従来、御手印縁起とは単に『御手印縁起』の名がつけられた単独の典籍を指してかく呼ばれてきた。しかるに、内容を比較検討した結果、極めて類似性が強いことから、『遺告諸弟子等』『太政官符案并遺告』『御手印縁起』『遺告真然大徳等』の四つの典籍を、一括して広義の御手印縁起と称して論すべきことを提案した。第二は、これら御手印縁起は、いつ・いかなる目的で作成されたかである。成立年代については有力な説が三つある。①平治元年(1159)説、②寛弘元年(1004)か、その直前説、③寛治2年(1088)説の三つであるが、②は①を批判する形で出され、③は②を批判する形で提出された。本稿では③の説が成り立たないこと、②の寛弘元年説が妥当であることを論証し、つぎの結論に至った。御手印縁起は、正暦5年(994)の大火によって壊滅的な打撃を蒙った高野山が復興の財源=寺領を確保するために作成された、と。具体的に記すと、阿帝河莊は高野山領であると高野山が主張した際、その領有権を主張する根拠となる記録、いいかえると阿帝河莊は大師が丹生津比売命から譲渡された由緒正しい所領の一部であることを証明する記録として作成された。しかも、大師の遺言状に明記されているところで、由緒ただしさを強調せんがために遺告の形をとり、大師の手印と称するものを捺したと考えた。
32	往生伝にみられる合刹について—『理趣経』付加句の典拠をめぐって—	単著	1996. 3 (平成8年3月)	『印度学仏教学研究』44-2 [通88]	『表制集』は、空海によってわが国に請來されると、ただちに最澄が書写するために借り出された。この最澄によって書写された系統の写本と思われるものが二本伝存する。一つは①寛治元年(1087)に書写された青蓮院旧蔵本であり、あと一つは②平安中期写の東寺觀智院本である。①は大原僧都長宴の付法弟子・良祐が校合し朱点を加えたものであり、②は持明房延殷が朱点を加えたものといわれる。良祐と延殷はともに慈覚大師の法流を相承する僧であり、その続き柄は延殷—長宴—良祐となって、きわめて近い間柄であったことがわかった。そこで、延殷と良祐にいくつかの新しい知見がえられたので、二人の事蹟を記すとともに、『表制集』①と②の関係を論じたのが本稿である。その結果、①と②の関係は、親子ではなく、同じ祖本をもとに書写された兄弟の間柄にあるとの結論に達した。

33	延暦の遣唐使をめぐる 一・二の問題	単著	1996. 3 (平成8年3月)	『高野山大学大学院 紀要』 創刊号	躍した11世紀から12世紀当時、臨終に際して合殺を唱えることが流行っていたことがわかった。この流行をうけて、真言宗でも合殺をふくむ作法が考え出された。それが『理趣三昧法則』であり、のちの『理趣経』付加句であった。よって、『理趣経』の付加句はおそらく天台宗所用の『例時作法』を典拠として付加されるに至った、と考える。
34	御遺告の成立過程 一附. 御遺告項目対照表 一・二	単著	1996. 3 (平成8年3月)	『密教学会報』 35号	空海と最澄がともに入唐した延暦の遣唐使については、未解決の問題が少なくない。本稿では、二つのこと、すなわち①遣唐使の組織はどうであったか、②空海が帰国するとき乗船した高階遠成の船は、いかなる目的をおびた遣使であったのか、について考察した。①では、四隻の船に分乗して600名近い人が唐にわたったけれども、入唐または帰国したことが明らかになった人員は、たったの24名であった。②では、これまで(1)第4船とみなす説、(2)新しく即位した皇帝への祝賀のためにあったとみなす説が提示されていた。このうち、(2)の説が成立しないことを証明し、あわせて高階遠成の船は延暦の遣唐使の第4船とみなさざるをえないことを論証した。
35	三業度人の制をめぐる 一・二の問題	単著	1996. 9 (平成8年9月)	高野山大学創立 百十周年 記念 『高野山大学論文集』	論旨は30と同じであるが、そこでは紙数の関係から十分に論じられなかった点を補い、註をつけるとともに、遺告四本の本文を対照した表を資料として提示した。
36	実惠受具年齢攷	単著	1998. 5 (平成10年5月)	佐藤隆賢博士 古稀記念論文集 『仏教教理思想の 研究』 山喜房仏書林	三業度人とは、承和2年(835)正月、空海の上表にもとづいて真言宗におかれた年分度者3名のことをいう。このときの太政官符は注目され、種々論じられてきた。しかしながら、同年8月20日、これら三人の年分度者の選考方法・場所・期日などを定めた官符が下されたが、この官符はなぜか注目されていない。この官符には空海の文章が引用されており、最晩年の空海が弟子たちに託した一つの意志・メッセージを読みとることができることから、もっと注目されてよい。本稿では①官符の真偽、②上表文の作者、③内容の分析を行なった。その結果、空海がこの三業度人の制に託されたことは、東寺長者みずからが中心となって資質のすぐれた学生を選び、十八道一尊法の修行と經論の学習のために六ヵ年の籠山を課し、行学を兼ねそなえた国家に有用な僧を養成することであり、このことをもって、真言密教の永続化をはかられた、との結論をえた。
					空海の示寂後、空海に替わって真言宗を統括し、真言宗の永続化のために多大の功績を残したのが実惠であった。しかし、その事蹟には不明な点、再考されるべき点が少くない。その一つ、
					22頁
					1-33頁
					24-76頁
					85-108頁

				実恵が具足戒を受けたのが何歳のときであったかについて論じた。先行研究は、すべて江戸時代に成立した史料にもとづき、実恵の受具は19歳の延暦23年であったとみなす。奈良から平安初期にかけての出家・受具に関する法の規定を精査すると、この19歳受具説は規定に違反することになる。史料批判を加えつつ、実恵の伝記史料を検討した結果、具足戒を受けた延暦23年時点で実恵の年齢は21歳とすべき結論に至った。		
37	『金剛峯寺建立修行縁起』 覚書状	単著	1998. 8 (平成10年8月)	山崎泰廣教授 古稀記念論集 『密教と諸文化 の交流』 永田文昌堂	この『修行縁起』は、草創期の高野山を研究する上での根本史料の一つである。従来、『弘法大師伝全集』所収本を用いて成立年代・作者などが論じられてきた。しかるに、院政期写の天理図書館蔵本を底本とし、写本7本・活字本3本を校合本として校訂本を作成したところ、さきの『伝全集』本は本来の形から大きくかけ離れていることが判明した。これら校訂本を作成する過程で明らかになつたことをまとめ、あわせて写本の系統・成立年代を論じるときの問題点などを指摘した。	34頁
38	弘福寺別当歿	単著	1998. 10 (平成10年10月)	皆川完一編 『古代中世史料学 研究』下巻 吉川弘文館	『御遺告』によると、弘福寺(=川原寺)は京から高野山への往還の宿所として淳和天皇から空海がたまわったとする。従来、この記述は9世紀末に弘福寺が東寺の末寺となつたあとに創作されたとみなされてきた。私は、東寺に伝存する9世紀後半から10世紀初頭にかけての弘福寺検校・別当の補任に関する太政官符六通と真雅の最古の伝記『故僧正法印大和尚位真雅伝記』の検討から、つぎのように考える。弘福寺の空海への下賜説は、まったくの創作とは考えがたく、特に空海が入定にさいして弘福寺を真雅に付嘱する『御遺告』の記述は、少なくとも承和2年(835)に真雅が弘福寺別当に任せられた事実をふまえて書かれしたものである、と。	38頁
39	空海の乙訓寺別当補任説を めぐって	単著	2000. 12 (平成12年12月)	高木謙元博士 古稀記念論集 『仏教文化の諸相』 山喜房仏書林	古來、真言宗では弘仁2年(811)11月19日付の太政官符によって乙訓寺の別当に任せられ、翌年10月末までの約1年間、別当として乙訓寺に住しておられた、とみなされてきた。しかるに近年、太政官符の読みの誤りが指摘され、空海が乙訓寺の別当となつたとするのは疑わしい、との説が提出された。そこで、乙訓寺の別当補任説の根本史料である上記太政官符、ならびに平安から鎌倉初期にかけて成立した空海伝にみられる乙訓寺別当補任説を詳細に検討した。その結果、空海が乙訓寺の別当職についたとみることはで	43頁

40	泰範の生年をめぐって —承和四年四月五日付 僧綱牒の信憑性—	単著	2002. 2 (平成14年2月)	『高野山大学論叢』 37巻	きないにしても、「彼の寺を別当して、永く修造の事に預からしむ」とあることから、別当に准ずる政治力・指導力をもって寺の修理・造営にあたることを命じたものと解することができる、との結論に至った。
41	『三僧記類聚』諸本と その書誌的概要	単著	2002. 3 (平成14年3月)	『『三僧記類聚』に 関する総合的研究』 科研費報告書	平安仏教の両巨頭である最澄と空海が袂を分かつことになった最大の原因ともみなされるのが、泰範の叡山への帰山拒否である。ともあれ、承和4年(837)4月5日付の僧綱牒は、泰範の生年と臘を知ることができる唯一の史料として珍重され、泰範の生年と受具の年を記宿禰場合、必ず依用されてきた。しかし、この僧綱牒は、これまで一度もその信憑性が疑われたことはなかった。しかるに、この僧綱牒を収録する最古の史料である『東宝記』の原本と活字本との記事の相違から、僧綱牒そのものを一度疑ってみると必要があると考えるにいたった。そこで、①『東宝記』の原本と活字本との違いがなぜ起きたのか、②原本『東宝記』卷七所収の「最初二十一口交名」、③原本『東宝記』第十三と活字本『東宝記』第七所収の承和四年四月五日付僧綱牒、④僧綱牒と同時代の実惠書状、などを検討した。その結果、泰範は承和4年(837)以前にすでに示寂していたと考えられ、したがって承和四年四月五日付僧綱牒そのものも極めて疑わしくなった。これより、この僧綱牒をもって泰範の生年・臘を論じることはできない、と考える。
42	禅覚僧都の生涯とその著作	単著	2002. 3 (平成14年3月)	『『三僧記類聚』に 関する総合的研究』	『三僧記類聚』15巻(9冊現存)は、平安から鎌倉へ時代が大きく転換しようとしていた時期に編纂された仏教的百科全書とでもいうべき著作であり、平安時代日本仏教の宗教儀礼・実践・教学・美術などを集大成したものである。編者は、仁和寺相応院の禅覚である。本稿では、『三僧記類聚』関連の写本を悉皆調査し、書誌的概要の検討から写本に3系統あることが明らかとなった。調査した写本は、『三僧記類聚』13本、『三僧記』3本、『雜鈔』1本の計17本であり、3系統とは仁和寺本・三千院本・龍光院本の三つである。
43	『三僧記類聚』と 『三僧記』の関連	単著	2002. 3 (平成14年3月)	『『三僧記類聚』に 関する総合的研究』	『三僧記類聚』の撰者である禅覚の伝記史料を網羅的に蒐集するとともに、彼の著述の発掘を心がけ、新出の典籍3本をあわせて計6本の存在を確認した。またしんしゅつの『乞戒』を前文翻刻した。

44	『三僧記類聚』と 高野山宝寿院蔵『雑抄』	単著	2002. 3 (平成14年3月)	存する『三僧記』二巻に収載されている項目を『三僧記類聚』の項目と逐一対照したところ、項目の配列が部分的に『三僧記類聚』のある巻とまとまって重複することから、『三僧記』の項目は『三僧記類聚』から抄出したものである、と考えるに至った。つまり、従来の説とは逆に『三僧記類聚』の成立が『三僧記』に先立つことが明らかとなった。
45	御宝号念誦の原始	単著	2002. 5 (平成14年5月)	『三僧記類聚』の成立過程をかんがえるとき、宝壽院蔵『雑抄』の成立が『三僧記類聚』のそれに先立つとみなされてきた。しかし、その作業行程には疑問が残るものであった。そこで、宝壽院蔵『雑抄』に収録されている項目を『三僧記類聚』の項目と逐一対照したところ、項目の配列が部分的に『三僧記類聚』のある巻とまとまって重複することから、宝壽院蔵『雑抄』の項目は『三僧記類聚』から抄出されたことが明らかとなった。『三僧記』の場合と同様に、従来の説とは逆で『三僧記類聚』の成立が宝壽院蔵『雑抄』に先立つことは間違いないといえる。
46	定尊阿闍梨攷	単著	2002. 10 (平成14年10月)	御宝号とは、真言宗の寺院および弘法大師を振興する人のあいだで、朝夕の勤行または各種の法会・集会などで、必ず唱えられる八字からなる「南無大師遍照金剛」、または六字からなる「南無遍照金剛」をいう。この御宝号の念誦がいつ・どこで・誰がはじめたのかについての本格的な研究は、皆無に近い。確実な史料にもとづいて御宝号念誦のはじまりを考察したのが本稿である。往生伝・『弘法大師講式』『秘密念佛抄』『掌中明鏡抄』『三僧記類聚』を分析した結果、①平安末の12世紀には御法号がとなえられていたこと、②御宝号の成立の背景には浄土思想との関連がうかがえること、が明らかとなった。
47	空海の出自	単著	2003. 12 (平成15年12月)	覚鑓の高野山登山の動機を定尊に師事するためであった、とみなす見解も出されているが、定尊その人についての研究はほとんどなされていない。二・三の先行研究には、二人の定尊を一人の人柄とみなすなど、史料の取り扱い方に問題があった。本稿では、新出の史料を加えて関係史料の整理・分析を行い、二人の定尊を明確に分け事蹟の把握につとめるとともに、覚鑓とのかかわりが考えられる定尊の出自を明らかにした。
				空海を出した讃岐国佐伯直氏の家系を知る唯一の史料『日本三代実録』貞觀三年(八六一)十一月十一日条を分析し、空海の兄弟た
				28頁
				14頁
				22頁
				1-53頁

48	東寺觀智院蔵『天台血脉』の研究(一) 一本文篇一	単著	2004. 2 (平成16年2月)	『高野山大学論叢』39巻	ちがそろって地方在住者としては破格の高い位階を有していたことを手がかりに、空海の生家が相当の経済力をもつた一族であったこと、その財源は船による交易活動によること、かつ佐伯直氏と空海の母・阿刀氏との出逢い・当時の婚姻形態の考察から、空海の誕生地は讃岐ではなく、畿内と考えてこそ、空海のすべての活動を合理的に説明できることをはじめて指摘・推考した。
49	寛信撰『類秘抄』の諸本と巻数をめぐって	単著	2004. 3 (平成16年3月)	『勸修寺論輯』創刊号	天台宗の血脉で、活字化されたものはおそらく一本もない。そこで、天台宗関係の血脉のなか、もっとも詳細なもの一つ東寺觀智院蔵の『天台血脉』一巻(鎌倉時代書写)を全文翻刻し、索引を付して公開した。
50	空海伝に関する考古学的発掘・二題	単著	2004. 3 (平成16年3月)	『密教学会報』42号	寛信撰『類秘抄』は、従来、『真言宗全書』第二七に収録されている七冊本が知られていた。しかるに、この活字本には見当たらない二帖を含む五帖本が勸修寺で見つかった。しかもこの新出の勸修寺本は、平安後期の仁平三年(一一五三)に雅宝が書写した古写本であった。一方、東寺觀智院には寛信の著作目録『勸修寺法務抄物目録』が伝来する。『類秘抄』の活字本と新出本とこの寛信の著作目録を対照したところ、「類秘抄」を命名された著作以外に「抄物」と記された著作も、「類秘抄」の名で伝存していることが判明した。このことを手がかりに古写本・目録類を精査したところ、『類秘抄』は本来、二十五冊前後あったことが明らかとなった。
51	奈良時代における『大日經』の受容	単著	2004. 6 (平成16年6月)	仏教文化学会十周年 北條賢三博士古稀記念論文集 『インド学 諸思想とその周辺』 山喜房仏書林	2003年、空海の伝記を研究する上で、きわめて興味深い二つの考古学的発掘が報じられた。一つは神戸港の起源とされる「大輪田泊」の奈良時代に遡る遺構が確認されたことであり、一つは空海の本籍地「讃岐国多度郡方田郷」にかかる七世紀後半期の木簡が発掘されたことである。これらの新聞報道と空海の事績との関係を解説するとともに、新たな問題点を指摘した。
52	『印信 法務御房集』の研究(一) —解題・本文校訂・影印一	単著	2005. 3 (平成17年3月)	『高野山大学密教 文化研究所紀要』 18号	空海入唐の動機の一つにあげられるのが久米寺における『大日經』の披見とそれに伴う疑義を記す『御遺告』の記述である。本稿では、正倉院文書を分析した結果、奈良時代には十四本の『大日經』が書写されていること、それらの『大日經』は単独ではなく一切経の一部として書写されていることが判明した。このことを手がかりに、奈良時代に存在した一切経を検討したところ、この当時、少なくとも二十部を下らない『大日經』が存在していたことを提示し、あわせて空海が平城京内で『大日經』を披見することはそれほど難しくなかったことを指摘した。
					今日、伝法灌頂を传授した証として阿闍梨から弟子に授与される紙に書いた印信の起源および変遷については、不明な点が多く、かつ定説もない。ここに翻刻紹介した『印信集』一巻は、阿闍梨から弟子に授与される印信三通、すなわち印信・血脉・紹文のうち、紹文二十二通と付嘱状三通を勸修寺法務・寛信が集成したものであり、(一)10世紀中葉から12世紀はじめにかけ
					13-87頁 5-21頁 3-22頁 383-416頁 31-116頁

53	覚鑓上人書写の『小野六帖』	単著	2005. 3 (平成17年3月)	『智山学報』第54輯 (『遠藤祐純先生吉田宏哲先生古稀記念『慈悲と智慧の世界』)』	て真言宗で授与された紹文二十通と(二)9世紀初頭から10世紀中葉にかけて天台宗で授与された紹文二通と付囑文三通からなる。これらは先に記した印信の起源およびその変遷を知る上で基本となりうる史料と考え、その全文を翻刻紹介し、あわせて従来の説の不備を指摘した。また、(二)に含まれる五通のうちの四通が、室生天台に関する新出史料であることも指摘した。
54	『勸修寺理明房私抄目録 又覚禪百巻抄目録』覚書	単著	2005. 10 (平成17年10月)	『堯栄文庫研究紀要』 第6号	空海の時代にまで遡る作法次第を収録する史料として著名なのが仁海撰『小野六帖』七冊である。この『小野六帖』の古写本には、覚鑓が鳥羽宝蔵本を書写したことを記す奥書を有するものがある。これら古写本の蒐集・分析により、覚鑓伝に新しい事績を追加するとともに、覚鑓の時代には少なくとも十本を下らない『小野六帖』の写本が存在していたこと、および『瑜祇懶行法私記』『万サ糸大六人』を含む九帖本として伝存していたことなどを指摘した。
55	造大輪田船瀬所別当補任説をめぐって	単著	2005. 11 (平成17年11月)	頼富本宏還暦記念論文集 『マンダラの諸相と文化』 〔上〕 法藏館	覚禅(1143~1213~)の撰による『覚禪鈔』は、四百近くの図像を収録しており、東密系のもつとも広汎な図像集であるとともに諸尊法を集成したものとして、つとに著名である。しかし『覚禪鈔』は、覚禅一人に帰せられるべきものではなく、その師・理明房興然のはたした役割の大きかったことが指摘してきた。どこまでがその師・興然から受け継いだもので、どこからが覚禪のオリジナルであったかを見極めるためには、興然の著作を明確にしておく必要があると考える。ここに紹介した『私抄目録』は、興然の自筆目録を書写したもので、その史料的価値はきわめて高く、『覚禪鈔』を研究する上での根本史料になりうると考え、全文を翻刻した。
56	空海の出家と入唐	単著	2005. 12 (平成17年12月)	弘法大師入唐千二百年 記念論文集『弘法大師 空海と唐代密教』 法藏館	2003年6月、考古学の発掘調査により、神戸港の起源とされる「大輪田泊」の奈良時代にさかのぼる遺構が見つかったことが報じられた。このことを手がかりに、従来、大輪田泊を論じた先行研究ではまったく取りあげられたことのなかった天長二年(八二五)三月、空海が造大輪田船瀬所の別当に補任されてとする説に検討を加え、かつ平安初期の大輪田泊の変遷を論じた。その結果、空海の生家が船を所有し交易活動を行っていたことが首肯されるならば、空海の造大輪田船瀬所別当への補任は十分ありえたことを指摘した。
57	空海の出家及入唐	単著	2005. 12 (平成17年12月)	『古代中国：東亜世界的内在交流』 復旦大学出版社	有力視してきた延暦二十三年(八〇四)四月、第二回目の出帆直前に出家し入唐したとみなす説を、史料の扱いの不備と矛盾から斥け、新たに同二十二年四月出家・翌二十三年四月入唐説を提示し、留学僧への選任の時期も出家の直前であったとの新説を提唱した。
58	最晩年の空海	単著	2006. 3	『密教文化』216号	「空海の出家と入唐」の中国語版。
					空海は、入寂前3ヶ月の間に、真言宗と高

			(平成18年3月)	
59	空海はいつ長安を出立したか	単著	2007. 2 (平成19年2月)	『高野山大学論叢』42巻 野山の永続化をはかるための方策を矢継ぎ ばやに打たれ、5つの勅許を得られた。従来、 これらの勅許は、南都諸大寺の僧との早く からの交渉と顕教への深い造詣によるとみ なされてきた。しかるに私は、これら5つ の勅許が短期間に下された裏には、空海の 擅越の一人であり、かつ政治の中枢にいて 上卿をつとめた藤原三守が、空海と天皇と のあいだに立って、政治的手腕をもって事 を処理したと考える。
60	三業度人の制の変遷	単著	2007. 3 (平成19年3月)	『福田亮成先生古稀 記念 密教理趣の宇 宙』（『智山学報』 第56輯） 従来、空海が帰国するため長安を出発し たのは延暦二十五年(八〇六)三月とみなさ れてきた。しかし、空海が帰国したとき に乗った遣唐使第四船の船長・高階遠成に 出された告身の日付け、それに帰国直前に 漢詩を交換した朱千乗等と出逢ったのが延 暦二十五年(八〇六)三月末、越州において であったことが明らかとなったことを手が かりとし、長安から越州まで四十日から五 十日を要したことを勘案し逆算すると、少 なくとも二月初旬に長安を出立していたこ とは間違いないと考えるにいたった。
61	『空海僧都伝』と『遺告二十五ヶ条』	単著	2007. 3 (平成19年3月)	『空海僧都伝』と 『遺告二十五ヶ条』 密教文化 第218号 承和二年(八三五)正月、空海の奏請にもと づいて、真言宗に年分度者三名—金剛頂 業・胎蔵業・声明業各一人—が勅許され た。この三名の年分度者を三業度人の制と いう。同年八月、年分度者に関する細則が 定められ、試験を受ける者・試験をする者 の資格、試験の内容と場所、合格者の処 遇、受戒後の六年間の籠山行などが定めら れた。仁寿三年(八五三)には、真濟の奏請 により、神護寺分として三名の増員がみと められ、それに伴い高野山で行なわれてい た試験と得度が東寺で行なわれるようにな り更された。その後、試験と得度の場所をめ ぐって、東寺・高野山・神護寺のあいだで 確執が惹起し、年分度者の制は二転三転し たけれども、延喜七年(九〇七)寛平法皇の 英慮により、あらたに東寺分として四名の 増員がみとめられ、従来の六名を三名ずつ 高野山・神護寺分とすることにより、年分 度者をめぐる三者の争いに終止符がうたれ ることになった。この経緯を、根本史料に もとづいて詳説した。
62	弘法大師空海の出自と 誕生地をめぐって	単著	2007. 3 (平成19年3月)	豊山教学大会紀要 35号 従来、『遺告二十五ヶ条』(以下、『御遺 告』)の空海伝(第一の縁起)は、『空海僧 都伝』(以下、『僧都伝』)を下敷きとして 作成されたとみなされてきた。しかし、本稿 では、『御遺告』と『僧都伝』の項目対 照表を作成し、本文を克明に比較するととも に、空海の入定を匂わせる文章の有無など から、従来とは逆に、『僧都伝』の方が 『御遺告』よりも遅く成立したと結論づけ た。
				これは、豊山教学大会における記念講演を 活字化したものである。従来、空海が讃岐 国で生れたことを疑ったものはいなかつ た。しかるに、①空海の一族の多くの者が 高い位階をもっていたこと、②高い位階に 見合うだけの強大な経済力を有していたこ と、③この経済力は何によつてもたらされ たのか、④奈良から平安時代にかけての婚 姻の形態、⑤母の出自である阿刀氏が讃岐 に住んでいた記録がないこと、などを勘案

63	勸修寺蔵『大師行法』 —大師宝号の始原をめぐって—	単著	2007. 7 (平成19年7月)	勸修寺論輯 3・4合併号	することにより、空海は阿刀か集団で住んでいた畿内で誕生したと考えた。このように考えることにより、空海の生涯をより矛盾なく説明できるといえよう。
64	真言寺院におかれた年分度者	単著	2007. 12 (平成19年12月)	加藤精一博士古稀記念論文集『真言密教と日本文化』	大師宝号とは、空海を信仰の対象として唱える「南無大師遍照金剛」(八字の宝号)または「南無遍照金剛」(六字の宝号)をいうが、これらの宝号はいつ・どこで唱えられるようになったのかについては、いまだ明確ではない。承安五年(一一七五)に書写された奥書を有する『大師行法』には、大師宝号を千遍誦することが記されており、六字の宝号を記す平安時代にまさかのぼりうる最古の史料として注目される。建長元年(一二四九)に七十四歳で示寂した実賢の口説をまとめた『掌中明鏡抄』にも同じ内容の次第が収録されており、これらを総合すると、平安末期には六字の宝号が日常的に念誦されていたことは間違いないと考えにいたった。
65	阿刀宿禰氏歿 —空海の母の出自をめぐって—	単著	2008. 2 (平成20年2月)	高野山大学大学院紀要 10号	真言宗を対象として置かれた年分度者のほか、真言宗に属する諸寺院にも少なからず年分度者が置かれていた。すなわち、海印寺に二人、貞觀寺に三人、安祥寺に三人、大覺寺に二人、円成寺に二人、仁和寺に三人、勸修寺に二人と、計十七名を数えた。いつ、いかなる経緯で年分度者が置かれたのかを検討するとともに、これらの寺院の創立にかかわった檀越と僧との関係にも注目した。ともあれ、十世紀初頭には、真言寺院では毎年二十七名の僧を得度させることができたのであり、年分度者の数からいえば天台宗を凌駕していたといえる。

					やうじり、火物を燃へて山煙ノハノ、の ろうと推察した。
66	東寺長者攷一九・ 十世紀を中心として一(上)	単著	2008. 3 (平成20年3月)	密教文化 220号	<p>従来、空海閉眼後の真言宗は、承和三年(八三六)五月十日に任せられた実恵を嚆矢とする東寺長者を中心として維持・運営されてきた、と解されてきた。これは、後世に編纂された『東寺長者次第』『東寺長者補任』などの記述を鵜呑みにしたものであって、九・十世紀の公文書・六国史類には、「東寺長者」は一切見出せない。現存する史料における初見は、空海の遺言状と見なされてきた十世紀中ごろ成立の『遺告二十五ヶ条』(『御遺告』と略称す)であり、これにつぐのが、康平三年(一〇六〇)十一月成立の成尊作『真言付法纂要抄』である。</p> <p>本稿では、まず『御遺告』にみられる「東寺長者」「長者」をすべて抽出し、検討を加えた。その結果、四つの特色が認められた。(一)実恵を(初代の)東寺長者とみなすこと、(二)東寺長者とは、膳次には関係なく、最初に僧綱に補任された者をかく称すること、(三)東寺長者=座主大阿闍梨耶=座主大別当と解される文章が散見されること、(四)東寺長者の職掌として、①東寺大經藏の管理、②御願の灌頂会の大阿闍梨を勤めること、③年分度者の課試と得度、④弘福寺の管理・運営、⑤金剛峯寺の管理・運営、の五つをあげうこと、の四つである。</p> <p>第二に、真言宗に関する史料のなか、「長者」なる語が見られる最初の三つの史料—『醍醐天皇御記』『弁官下文』『三十帖策子勘文』—に検討を加えた。いずれも延喜十九年(九一九)十一月に書かれたものであり、三つの特色を指摘できた。(一)三つの史料には、「宗長者」「宗之長」「代々宗長者」「真言長者阿闍梨」「門徒僧綱宗之長者」といった語がみられること、(二)延喜十九年の時点で、すでに「宗長者」なる職が設置されていたとみなしうること、(三)この「宗長者」は、真言宗一門を代表する統括者の意で使用されていること、の三つである。</p> <p>第三に、全国の諸寺に寺家別当が置かれていたとの指摘を手がかりに、東寺別当を検索したところ、仁和四年(八八八)五月二十四日付「東寺解由状案」の真然を初出として、九世紀末に三つの史料を見いだすことができた。</p> <p>以上の結果にもとづいて、真言宗一門の統括者としての「東寺長者」なる呼称が成立する過程として、 造東寺所別当 → 伝法阿闍梨 → 東寺別当(寺家別当) → 宗長者 → 東寺長者</p> <p>なる五段階を提示してみた。つまり、空海当時の造東寺所別当、実恵・真済時代の伝法阿闍梨、真然時代の東寺別当、觀賢時代の宗長者をへて、『御遺告』が成立する十世紀中ごろに「東寺長者」なる呼称が確立</p>
67	東寺長者攷一九・ 十世紀を中心として一(下)	単著	2008. 12 (平成20年12月)	密教文化 221号	上に同じ。
68	越州における空海—華嚴和尚 とはだれか—	単著	2009. 3 (平成21年3月)	密教学会報 46・47 合併号	空海が「金師子章并縁起六相」を請來されたことは、『御請來自目録』の記述からまちがいない。後世の記録によると、この「金師子章并縁起六相」は、越州において華嚴和尚のもとで入手したと空海みずからが記すという。この華嚴和尚とは誰であったか

					の解明を試みたのが本稿である。現時点では史料の制約もあって、「空海みずからが記した」との確証が得られないことから、華厳和尚から入手したか否かは疑った方がよいとの結論にいたった。
69	最澄・空海と靈仙	単著	2010. 10 (平成22年10月)	『遣唐使船の時代』 一時空を駆けた超 人たちー』 角川学芸出版	「密教」をキーワードに、延暦の遣唐使として時を同じくして入唐した三人の僧の入唐の目的・唐における足跡・何を持ちかえり、わが国の仏教界にいかなる影響を与えたか、に主眼をおいて、最新の研究成果を探り入れつつ論じた。わが国ではあまり知られていない靈仙であるが、短期間でインドのことばをマスターして日本人ではじめて訳経にたずさわり、翻經大徳の称号を得たにもかかわらず、最期は五台山で非業の死をとげた。しかし、靈仙が翻訳した『大乗本生心地觀經』は渤海僧を通じてわが国にもたらされ、やがて空海の目にとまり、空海に少なからず影響を与えたのであつた。三者三様の生き様を概観した。
70	東寺安居会攷	単著	2011年2月 (平成23年2月)	『高野山大学大学院 紀要』第12号	1～20頁
71	『御遺告』の成立年代 —堅恵関連の史料を中心 として—	単著	2011年3月 (平成23年3月)	『密教学研究』第43号	59～82頁
72	金剛三昧院蔵『覺禪鈔』を めぐって	単著	2011年5月	真鶴俊照編『密教美術と歴史文化』 法藏館	95～120頁
73	少年時代の空海—仏道を志 したのはいつか（一）—	単著	2012年2月	『高野山大学論叢』第47巻	1～31頁
74	少年時代の空海—仏道を志 したのはいつか（二）—	単著	2012年3月	『密教学会報』第50号	9～63頁
75	空海の著作に見られる 「身病」と「心病」	共著	2012年3月	『密教学会報』第50号 小池 薫氏との共著	135～152頁
76	安史の乱・薬子の変と密教	単著	2012年1月	『京都・宗教論叢』第6号	42～44頁
79	空海と東寺—東寺勅賜説を めぐって	単著	2013年2月	『高野山大学大学院紀要』第13号	1～23頁
80	空海時代の天変地異	単著	2013年3月	『密教学研究』第45号	25～89頁
81	角筆がみられる祖典—高野 山大学図書館蔵『即身成仏 義』—	単著	2013年3月	『密教学会報』第51号	～頁
【科学研究費補助金】					
1	奨励研究 (A)高野山光明院旧蔵 典籍文書の研究		1983年度 (昭和58年)		
2	一般研究 (C)寛平法皇御撰述書 の基礎的研究		1993～94 年度 (平成5年～6年)		
3	出版助成 寛平法皇御作次第集成		1996年度		

4	基盤研究（B）(1) 『三僧記類聚』に関する総合的研究	(平成8年) 1999～ 2001年度 (平成11年-13年)				
5	出版助成 弘法大師空海の研究	2005年度 (平成17年)				
1	(史料翻刻) 東寺作子新写目録	単著 1982. 11 (昭和57年11月)	『史学論叢』10号 東京大学古代史研究会	翻刻	5頁	
2	道範著『秘密念佛抄』 —本文校訂—	単著 1985. 2 (昭和60年2月)	『高野山大学論叢』20巻	翻刻・校訂	44頁	
3	寛平法皇御作次第の研究(一) —翻刻篇(一) —	単著 1989. 2 (平成元年2月)	『高野山大学論叢』24巻	翻刻・校訂・解説	133頁	
4	寛平法皇御作次第の研究(二) —翻刻篇(二) —	単著 1990. 2 (平成2年2月)	『高野山大学論叢』25巻	翻刻・校訂	42頁	
5	寛平法皇御作次第の研究(三) —翻刻篇(三) —	単著 1990. 3 (平成2年3月)	『密教学会報』29号	翻刻・校訂・解説	22頁	
6	寛平法皇御作次第の研究(四) —翻刻篇(四) —	単著 1991. 3 (平成3年3月)	『密教学会報』30号	翻刻・校訂・解説	46頁	
7	石山寺蔵『不空三蔵表制集』 の研究	単著 1992. 3 (平成4年3月)	『高野山大学密教文化研究 所紀要』5号	翻刻・校訂・解説		
8	東寺觀智院金剛藏本『真言付法 血脉 仁和寺』	単著 1993. 1 (平成5年1月)	『高野山大学密教文化研究 所紀要』6号	翻刻・校訂・索引	93頁	
9	東寺觀智院金剛藏本『密教師資 付法次第 千心』	単著 1993. 2 (平成5年2月)	『高野山大学論叢』28巻	翻刻・解説・索引	69頁	
10	寛平法皇御作次第の研究(五) —翻刻篇(五) —	単著 1994. 2 (平成6年2月)	『高野山大学論叢』29巻	翻刻・解説	109頁	
11	五島美術館蔵『不空三蔵 表制集』の研究	単著 1994. 12 (平成6年12月)	『高野山大学密教文化 研究所紀要』8号	論文篇の28に同じ		
12	寛平法皇御撰述書の研究(一) —翻刻篇(一) —	単著 1995. 3 (平成7年3月)	『密教学会報』34号	翻刻・解説	21-50頁	
13	石山寺蔵『禅林寺内供官灌頂 日記 諸師灌頂太政官牒文』	単著 1996. 2 (平成8年2月)	『高野山大学論叢』31巻	翻刻・解説	71-136頁	
14	『僧申文』の研究(一) —東寺觀智院金剛藏本—	単著 1997. 1 (平成9年1月)	『高野山大学密教文化研究 所紀要』10号	翻刻・解説	63-157頁	
15	『金剛峯寺建立修行縁起』の 研究(一) —本文校訂—	単著 1998. 1 (平成10年1月)	『高野山大学密教文化研究 所紀要』11号	翻刻・校訂・解説	21-80頁	
16	東寺宝菩提院蔵『三昧耶戒 円 成寺』の研究(一) —翻刻・ 解題—	単著 1999. 12 (平成11年12月)	『善通寺教学振興会 紀要』 6号	翻刻・解題	32頁	
17	『真言宗未決文』の研究(一) —本文校訂—	単著 2001. 2 (平成13年2月)	『高野山大学論叢』36巻	翻刻・校訂・解説	53頁	
18	『三僧記類聚』卷四・卷七	単著 2002. 3 (平成14年3月)	科研報告書	翻刻・校訂	41頁	
19	東寺觀智院蔵『天台血脉』の 研究(一) —本文篇—	単著 2004. 2 (平成14年2月)	『高野山大学論叢』39巻	論文篇の49に同じ		
20	『印信 法務御房集』の研究(一)	単著 2005. 3	『高野山大学密教文化研究	論文篇の53に同じ		

	—解題・本文校訂・影印—	(平成15年3月)	所紀要』18号		
21	『勸修寺理明房私抄目録 又覺禪百巻抄目録』覚書	単著 2005. 10 (平成15年10月)	『堯栄文庫研究紀要』 6号	論文篇の55に同じ	
22	金剛三昧院蔵『仏舍利宝珠同 体事』の研究(一)—翻刻と書 誌の概要—	単著 2010. 3 (平成22年3月)	密教学会報 48号		25~48頁
72	「高野山大学図書館蔵『真然 僧正伝』—翻刻と解題—」	単著 2011年3月 (平成23年3月)	『密教学会報』第49号		5~24頁
	【史料集】				5~24頁
1	後七日御修法交名綜覽 (一)	単著 1986. 2 (昭和61年2月)	『高野山大学論叢』21巻		52頁
2	後七日御修法交名綜覽 (二)	単著 1987. 2 (昭和62年2月)	『高野山大学論叢』22巻		22頁
3	後七日御修法交名綜覽 (三)	単著 1988. 2 (昭和63年2月)	『高野山大学論叢』23巻		13頁
4	後七日御修法関係典籍・ 文書目録 (一) —東寺觀智 院金剛藏—	単著 1988. 3 (昭和63年3月)	『密教学会報』27号		
5	後七日御修法関係典籍・ 文書目録 (二) —東寺百 合文書・高山寺聖教等—	単著 1989. 3 (平成元年3月)	『密教学会報』28号		31頁
6	後七日御修法関係典籍・ 文書目録 (三) (目録)	単著 1990. 3 (平成2年3月)	『密教学会報』29号		21頁
7	仁和寺真乗院第二世覺教 僧正伝	単著 1993. 3 (平成5年3月)	『密教学会報』32号	論文篇の23に同じ	
8	覺教僧正編年史料集 (二) —編年史料の部 (二) —	単著 1997. 3 (平成9年3月)	『密教学会報』36号		56~113頁
9	「覺教僧正編年史料集(三) -年未詳史料・略伝・補遺-」	単著 2001. 12 (平成13年12月)	『善通寺教学振興会 紀要』7号		6頁
10	高野山大学図書館・光明院文庫 典籍文書目録(一)	単著 2005. 2 (平成17年2月)	『高野山大学論叢』 40巻	光明院文庫の聖教目録。第1~3・5函分。	87~184頁
11	『大神神社権宮司 越 義則氏家聖教をめぐって 附. 越義則氏家所蔵聖教目録』	単著 2005. 3 (平成17年3月)	越 義則	三輪神道に関する聖教目録と解説。	93頁
12	高野山大学図書館・光明院文庫 典籍文書目録(二)	単著 2006. 2 (平成18年2月)	『高野山大学論叢』41巻	光明院文庫の聖教目録。第4・6・7函分。	51~149頁
13	高野山大学図書館・光明院文庫 典籍文書目録(三)	単著 2008. 2 (平成20年2月)	『高野山大学論叢』43巻	光明院文庫の聖教目録。第8函分。	27~122頁
14	『遺告二十五ヶ条』と『空海 僧都伝』の項目対照表	単著 2008. 3 (平成20年3月)	密教学会報 45号		
15	高野山大学図書館・光明院文 庫 典籍文書目録(四)	単著 2009. 2 (平成21年2月)	高野山大学論叢 44巻		19~130頁
16	高野山大学図書館・光明院文 庫典籍文書目録(五)	単著 2013年2月	『高野山大学論叢』第48巻		1~38頁

	【編集・解説】					
1	学習まんが『空海』	共編 単著	1984. 10 (昭和59年10月) 1986. 7 (昭和61年7月)	小学館 同朋社出版	全般にわたる編集協力・解説 責任編集・解説	154頁 解題6頁 全514頁
2	真言宗選書第七巻 『真言宗史』 I	単著	1986. 8 (昭和61年8月)	同朋社出版	責任編集・解説	解題4頁 全356頁
4	『定本弘法大師全集』 第一巻	共著	1991. 7 (平成3年7月)	高野山大学密教文化 研究所	本文校訂・解説	275頁中84頁
5	「日本密教II 解説」	共著	1994. 11 (平成6年11月)	『密教大系』 5 法藏館	編集・解説	457-480頁
6	「日本密教III 解説」	共著	1995. 3 (平成7年3月)	『密教大系』 6 法藏館	編集・解説	463-488頁
7	まんが『空海』 (ドラえもん版)	共編	1995. 10 (平成7年10月)	小学館	全般にわたる編集協力・解説	160頁
8	『定本弘法大師全集』 首 卷	共著	1996. 1 (平成8年1月)	高野山大学密教文化 研究所	年表他	20頁
9	『定本弘法大師全集』 第8巻 (『遍照發揮性靈 集』『拾遺雜集』)	共著	1996. 9 (平成8年9月)	高野山大学密教文化 研究所	本文校訂・解説	447頁
	【シンポジウム・学会発表】					
1	金剛三昧院本『覚禪抄』をめぐって		2009年7月	密教研究会平成21年度学術大会		
2	「最澄・空海と靈仙」		2010年4月25日	「遣唐使船再現プロジェクト 春日大社シンポジウム」 春日大社		
3	「新別所蔵『→一山図』攷」		2010年7月17日	密教研究会平成22年度学術大会 高野山大学		
4	「『御遺告』の成立年代 —堅恵闇連の史料を中心として—」		2010年10月22日	第43回日本密教学会学術大会 種智院大学		
	【その他・講演・学外講義】					
1	「山岳信仰と空海」と題して 9回連続講演		2010年7月～ 2011年3月	名古屋朝日カルチャーセンター		
2	「なぜ、空海は高野山に伽藍をたてたか」 (大学派遣出張講義)		2010年9月11日	篠山青年会議所 普賢院		
3	和歌山県立医科大学交換授業 「空海にみる生と死」「空海の人間観」		2010年9月13日	和歌山県立医科大学		
4	第三回いのちのセミナー 「空海の人間観」		2010年9月26日	昭和女子大学		
5	真言宗御室派美作・鳥取州 宗務支所教学講習会 「寛平法皇のご生涯に学ぶ」		2010年10月19日	真言宗御室派美作・ 鳥取州宗務支所		
6	第七回図書館文化講座 「古典籍の世界」		2010年12月21日	高野山大学		
7	空海の少年時代		2011年 7月 16日	密教研究会		
8	空海が伝えた灌頂		2011年11月6日	シンポジウム・灌頂 —王權儀礼のアジア的展開—	金沢大学	

9	空海と東寺		2012年6月9日	密教研究会平成24年度 学術大会	本学	
10	空海時代の天変地異		2012年10月19日	日本密教学会第45回 学術大会・シンポジウム	本学	
11	少年時代の空海 —仏道を志したのはいつか—		2012年9月17日	高野山大学公開講座	昭和女子大学	
12	空海と藤原三守		2012年12月14・ 21日	大学院学習支援会	東京・大阪	
13	高野山の開創とその意義		2012年9月27日	高野山真言宗宿山宗務支所教師研修会	富山市	
14	寛平法皇のご生涯に学ぶ		2012年10月25日	真言宗美作・鳥取宗務支所教師研修会	美作市	
【小論・レジュメなど】						
1	高野山の開創とその規模	単著	1981. 3 (昭和56年3月)	『石塔工芸』 1－6		6頁
2	越州の弘法大師	単著	1984. 4 (昭和59年4月)	毎日グラフ別冊 『空海長安への道 —いま弘法大師入唐 の足跡を辿る—』 毎日新聞社		3頁
3	日本密教の歩み	単著	1988. 3 (昭和63年3月)	『生かせいのち』 10号 高野山真言宗	わが国における密教の受容とその後の展開 を概観したものである。簡略なものとはいえ、奈良から江戸時代までの密教史を通観 できるよう配慮した。	31頁
4	密教とは秘密の宗教か	単著	1988. 6 (昭和63年6月)	『話題源歴史・心を 揺する楽しい授業』 東京法令出版	高校受験用参考書	1頁
5	『理趣経』付加句をめぐる 諸問題（一）	単著	1990. 3 (平成2年3月)	『宗教研究』 63－4		3頁
6	真然大徳のご生涯	単著	1990. 9 (平成2年9月)	『聖愛』 525号 高野山出版社	レジュメ	6頁
7	『「業論」への取り組み』	単著	1991. 6 (平成3年6月)	同和問題に関する真 言宗四派連合協議会	シンポジウム報告書	9頁
8	松長有慶著『密教』を読む	単著	1991. 10 (平成3年10月)	『高野山時報』 2606号	新刊紹介	2頁
9	嵯峨天皇と高野山 ①	単著	1992. 1 (平成4年1月)	『高野山時報』 2612号		3頁
10	興教大師覚鑄と伝法会に ついて	単著	1992. 3 (平成4年3月)	『宗教研究』 65－4	レジュメ	2頁
11	高野山文書	単著	1992. 4 (平成4年4月)	『日本歴史 「古文書」総覧』 新人物往来社	解説・文書紹介	2頁
12	『旃陀羅問題について』	単著	1992. 6 (平成4年6月)	真言宗各派第2回 同和研修会報告書 同和問題に関する真 言宗四派連絡協議会	シンポジウム報告書	6頁
13	中国新事情① —西安・西明寺の発掘—	単著	1993. 1 (平成5年1月)	『高野山時報』 2644号	翻訳・紹介	3頁

14	高野山の歴史（上・下）	単著	1993. 5 ～ 6 (平成5年5月～6月)	『風樹』 8 - 5・6 風樹俳句会		8頁
15	御宝号念誦のはじまり	単著	1994. 1 (平成6年1月)	『高野山時報』 2676号		5頁
16	第2回空海学術討論会に 参加して（前・後）	単著	1994. 1 ～2 (平成6年1月～2月)	『高野山時報』 2677, 2678号		4頁
17	密教を知るための手引き・ 日本密教史	単著	1994. 3 (平成6年3月)	『密教学会報』 33号		20頁
18	長安西明寺の第一次発掘調査 について	単著	1995. 1 (平成7年1月)	『高野山時報』 2709号	翻訳・紹介	76-81頁
19	密教を知るためのブック ガイド・日本密教	単著	1995. 11 (平成7年11月)	松長有慶編『密教を 知るためのブック ガイド』 法藏館		124-149頁
20	『不空三蔵表制集』の写本を めぐって	単著	1996. 3 (平成8年3月)	『宗教研究』 307号	レジュメ	262-263頁
21	弘福寺別当について	単著	1997. 3 (平成9年3月)	『宗教研究』 311号	レジュメ	205-206頁
22	『三僧記類聚』をめぐる 一・二の問題	単著	2000. 3 (平成12年3月)	『宗教研究』 323号	レジュメ	2頁
23	『理趣經』付加句をめぐる 一・二の問題 ①～④	単著	2000. 1 2000. 2 2000. 2 2000. 6 (平成12年1・2・6月)	①『高野山時報』 2867号 ② 同 2870号 ③ 同 2871号 ④ 同 2881号		6頁 3頁 3頁 2頁
24	大師の讃岐誕生説異聞①～③	単著	2001. 1 2001. 2 2001. 2 (平成13年1・2月)	①『高野山時報』 2899号 ② 同 2901号 ③ 同 2902号		6頁 3頁 3頁
25	『三僧記類聚』を引用する 典籍	単著	2002. 3 (平成13年3月)	『科研 報告書』		9頁
26	「空海博物館」の完成を祝す	単著	2002. 3 2002. 3 (平成14年3月)	『密教学会報』 39・40合併号		4頁
27	最澄との交友	単著	2002. 5 (平成14年5月)	『国文学 解釈と鑑賞』 66-5		10頁
28	『十住心論』—真言宗の の深義を大系化—	単著	2002. 5 (平成14年5月)	同上		9頁
29	「空海入唐」①～④	単著	2003. 1 2003. 1 2003. 2 2003. 2 (平成15年1・2月)	①『高野山時報』 2931号 ② 同上 第2932号 ③ 同上 第2933号 ④ 同上 第2934号		10頁 6頁 4頁 6頁
30	「空海博物館」の創設を 夢みる	単著	2003. 1 (平成15年1月)	『へんじょう』 第12号		2頁
31	「空海博物館」開館す	単著	2004. 1 (平成16年1月)	『高野山時報』 2963号		2頁
32	お大師様の本籍地に関する 新出史料	単著	2005. 1 (平成17年1月)	『高野山時報』 3027号		114-120頁
33	「方田郷」地名の木簡発見・ 後日譯	単著	2005. 3 (平成17年3月)	『密教学会報』 4 3 号		1-6頁
34	もう一つの入唐の動機	単著	2006. 1 (平成18年1月)	『高野山時報』 3059号		
35	『三僧記類聚』に関する総合	単著	2006. 2	『日本歴史』 693号	科研による総合的研究に対する特集号への	

	研究	(平成18年2月)	日本歴史学会	投稿。	
36	虚往実帰	単著 2005. 4 (平成17年4月)	高野山真言宗教学部 発行パンフレット		
37	もう一つの入唐の動機	単著 2006. 1 (平成18年1月)	高野山時報 3059号		
38	空海のことば（現代語訳）	単著 2006. 1 (平成18年1月)	井原寿庵『心で読みたい弘法大師のことば』所収 京都新聞出版センター		
39	空海の生涯 9つの謎(II・IV・VI・VII)	単著 2006. 12 (平成18年12月)	『空海の本』 学習研究社		
40	空海はいつ長安を出立したか	単著 2007. 1 (平成19年1月)	高野山時報 3091号		
41	空海はいつ長安を出立したか —朱千乗の詩序は越州で書かれた—（二）① ②	単著 2007. 2・3 (平成19年2・3月)	高野山時報 3095・3096号		
42	金剛峯寺新発見 何が空海を惹きつけたのか	単著 2007. 8 (平成19年8月)	『金剛峯寺』（仏教新発見8） 朝日新聞社		
43	日本に密教をもたらした民衆の救済者	単著 2007. 8 (平成19年8月)	『金剛峯寺』（仏教新発見8） 朝日新聞社		
44	官寺だった東寺がなぜ空海に授けられたのか	単著 2007・8 (平成19年8月)	『東寺』（仏教新発見9） 朝日新聞社		
45	弘法大師号の下賜をめぐって(1)	単著 2008. 1 (平成20年1月)	高野山時報 3123号		
46	大覚寺の歴史	単著 2008. 12 (平成20年12月)	『大覚寺』（古寺巡礼 京都28） 淡交社		
47	草創期の大覚寺	単著 2009. 1 (平成21年1月)	高野山時報 3155号		
48	観賢僧正伝攷	単著 2010. 1 (平成22年1月)	高野山時報 3187号	116-121頁	
49	観賢僧正伝攷(二)①②	単著 2010. 3 (平成22年3月)	高野山時報 3192・3193号	2-6頁 2-5頁	
50	観賢僧正伝攷(三)①②③	単著 2010. 9・10 (平成22年9・10月)	高野山時報 3209・3210・3211号		
51	「観賢僧正伝攷」第三章 観賢と真雅	単著 2011年1月 (平成23年1月)	『高野山時報』第3219号	pp. 4~8	
52	古典籍逍遙 第四回「『大毘盧遮那經義記』一巻」	単著 2010年5月 (平成22年5月)	『それゆけ！としょかんだより』第38号	1頁	
53	古典籍逍遙 第五回「満願寺文庫・高野板『大毘盧遮那成仏経疏』二十一帖」	単著 2010年6月 (平成22年6月)	『それゆけ！としょかんだより』第39号	1頁	
54	古典籍逍遙 第六回「『大悲胎藏曼荼羅經説現図所伝決明鈔』巻一・二 二帖」	単著 2010年7月 (平成22年7月)	『それゆけ！としょかんだより』第40号	1頁	
55	古典籍逍遙 第七回「『勸修寺長吏系伝略 慈尊院系譜』	単著 2010年8月	『それゆけ！としょかんだより』第41号	1頁	

56	一冊 古典籍逍遙 第八回「興然撰『四巻』第二 一巻」	単著 (平成22年8月) 2010年9月 (平成22年9月)	『それゆけ！としょかんだより』第42号	1頁
57	古典籍逍遙 第九回「『後七日御修法請僧交名 御再興已來』一冊」	単著 2010年10月 (平成22年10月)	『それゆけ！としょかんだより』第43号	1頁
58	古典籍逍遙 第十回「『真然僧正伝』一冊」	単著 2010年11月 (平成22年11月)	『それゆけ！としょかんだより』第44号	1頁
59	古典籍逍遙 第十一回「『高野山懶山(そうざん)之絵図(えず)』一鋪」	単著 2010年12月 (平成22年12月)	『それゆけ！としょかんだより』第45号	1頁
60	古典籍逍遙 第十二回「『紀伊国名所図会』三編巻四~六 高野山」	単著 2011年1月 (平成23年1月)	『それゆけ！としょかんだより』第46号	1頁
61	古典籍逍遙 第十三回 「『武州登山帳』四冊」	単著 2011年2月 (平成23年2月)	『それゆけ！としょかんだより』第47号	1頁
62	古典籍逍遙 第十四回 「『高野山秘記』一冊」	単著 2011年3月 (平成23年3月)	『それゆけ！としょかんだより』第48号	1頁
63	「一二〇〇年の叡智が凝縮した空間」	単著 2010年4月 (平成22年4月)	『それゆけ！としょかんだより』第37号	1頁
64	「真実の大師を求めて」	単著 2010年7月 (平成22年7月)	『高野山教報』第1472号	6~7頁
65	「序 一本書を推す一」中谷征充著『漢詩を通じて弘法大師空海の生涯を繙く 一空海漢詩文研究一』	単著 2011年2月 (平成23年2月)	高野山出版社	1~3頁
66	空海の生涯	単著 2011年9月	『大法輪』78巻9号	60~67頁
67	空海と密教美術	単著 2011年11月	『一個人』第137号	18~33頁
68	少年時代のお大師さま —仏道を志したのはいつか— ①~⑤	単著 2012年1~3月	『高野山時報』第 3249~3255号	135~138 · 4~6 · 2~4 · 2~4 · 2 ~ 6 頁
69	少年時代のお大師さま —仏道を志したのはいつか— ⑥ · ⑦	単著 2013年1~2月	『高野山時報』第 3280 · 3284号	60~66 · 2~7頁
【目録・年表・索引】				
1	日本密教史関係文献目録	単著 1976. 6 (昭和51年6月)	『現代密教講座』8 大東出版社	38頁
2	弘法大師関係文献目録 · 弘法大師関係年表	単著 1978. 3 (昭和53年3月)	中野義照編 『弘法大師空海』 吉川弘文館	56頁
3	空海をめぐる人々 · 人名索引	単著 1980. 3 (昭和55年3月)	『密教学会報』 17 · 18合併号	13頁
4	『初例抄』人名索引 —附・寺院名・諸法会	単著 1981. 3 (昭和56年3月)	『密教学会報』 19 · 20合併号	12頁
5	梅尾祥雲博士論文目録	単著 1981. 9 (昭和56年9月)	カリフォルニア大学 所蔵『梅尾コレクション 順密典籍文書集』	4頁

6	宝寿院聖教奥書索引 －人名・寺名等篇－	単著	1982. 3 (昭和57年3月)	『密教学会報』 21号		48頁
7	弘法大師の年譜	単著	1982. 7 (昭和57年7月)	『弘法大師展目録』		
8	空海文献目録	単著	1982. 11 (昭和57年11月)	『理想』 594号 理想社		4頁
9	宝寿院聖教索引 －典籍名篇・その一－	単著	1983. 2 (昭和58年2月)	『密教学会報』 22号		7頁
10	弘法大師御入定に関する 文献目録	単著	1983. 6 (昭和58年6月)	『御入定と大師信 仰』 (布教資料16) 高野山真言宗		8頁
11	弘法大師空海年譜・ 参考文献	単著	1984. 10 (昭和59年10月)	松長有慶監修 『弘法大師空海』 毎日新聞社		11頁
12	宝寿院聖教索引 －典籍名篇・その二－	単著	1986. 3 (昭和61年3月)	『密教学会報』 25号		15頁
13	真然大徳関係略年譜	単著	1989. 1 (平成元年1月)	『高野山時報』 2517号		3頁
14	『伝灯広録』人名項目索引	単著	1989. 5 (平成元年5月)	『仏教学会報』 14号		20頁
15	真然大徳年譜	単著	1990. 9 (平成2年9月)	『高野山第二世傳燈 国師真然大徳傳』		
16	密教関係文献目録 (中国・日本篇)	単著	1991. 3 (平成3年3月)	『高野山大学密教 文化研究所紀要』 4号		45頁
【辞書・辞典・事典項目】						
1	『福岡県百科事典』第五卷 項目	単著	1982. 11 (昭和57年11月)	西日本新聞社		
2	『国史大辞典』第三巻 項目	単著	1982. 12 (昭和57年12月)	吉川弘文館		
3	『和歌山県の地名』高野山の 項目	単著	1983. 2 (昭和58年2月)	『日本歴史地名 大系』 31 平凡社		13頁
4	『国史大辞典』第四巻 項目	単著	1983. 12 (昭和58年12月)	吉川弘文館		
5	『国史大辞典』第五巻 項目	単著	1984. 12 (昭和59年12月)	吉川弘文館		
6	『国史大辞典』第六巻 項目	単著	1985. 9 (昭和60年9月)	吉川弘文館		
7	「真言宗小辞典」	単著	1985. 10 (昭和60年10月)	松長有慶編『日本の 仏教・人と教え 2 真言宗』 小学館		21頁
8	『国史大辞典』第七巻 項目	単著	1986. 10 (昭和61年10月)	吉川弘文館		
9	『総合仏教大辞典』項目	単著	1987. 11 (昭和62年11月)	法藏館		
10	『仏教大事典』項目	単著	1988. 7 (昭和63年7月)	小学館		
11	『日本古代氏族人名辞典』 項目	単著	1990. 11 (平成2年11月)	吉川弘文館		
12	『日本佛教人名辞典』項目	単著	1992. 1 (平成4年1月)	法藏館		
13	岩波『日本史辞典』項目	単著	1999. 10 (平成11年10月)	岩波書店		

所属	文学部	職名	教授	氏名	武内孝善	大学院の授業担当の有無 (　有　)
教育活動						
教育上の主な業績		年月日		概要		
1. 教育内容・方法の工夫 (授業評価等を含む)		1982. 4～ (昭和57年4月～)		絵画資料等の活用。学生の理解を高めるために、ビデオ・CD-ROM・絵画資料等を積極的に講義に取り入れてきた。また、京都・奈良国立博物館などで開催される密教関係の展覧会にも、学外講義として学生と見学する機会を持ってきた。		
		1982. 4～ (昭和57年4月～)		ゼミ旅行の実施。学生の理解を高める一方法として、主として空海が関係を持った寺院等を京都・奈良・四国方面に訪ねるゼミ旅行を実施してきた。		
		2002. 10 (平成14年10月)		講義内容の公開。講義内容は、大学のホームページ上で公開している。		
2. 作成した教科書、教材、参考書		1984. 10 (昭和59年10月)		学習まんが『空海』(人物日本の歴史6) 表現方法はまんがであるが、史実に忠実に空海の生涯を構成したもので、好評をはくした。企画の段階からかかわりをもち全体の流れ・時代考証・解説の執筆など全般にわたって編集にたずさわった。なお、1995. 10月には装丁を一新し、ドラえもん版として今日も愛読されている。		
		2000. 8 (平成12年8月)		『高野山から弥勒の世界へ -弘法大師の生涯と高野山-』2000年8月 筆者の最新の研究成果を平易にまとめたもので、4章からなる。章題は、第1 弘法大師の出自、第2 弘法大師と密教との出会い、第3 弘法大師と伝教大師との交友、第4 高野山の開創と伝説。		
		2001. 12 (平成13年12月)		『あなただけの弘法大師 空海』空海の最古の絵巻物である高野山地蔵院本『高野大師行状図画』の絵に、新たに①現代の視点から平易に表現した空海の伝記と②絵の解説を加え、巻末に空海の略歴・年譜・空海のことば抄をまとめたもの。		
		2003. 4 (平成15年4月)		CD-ROM版高野山親王院本『高野大師行状図画』 高野山親王院本の『高野大師行状図画』全巻をCD-ROM化し、それに解説・詞書とその翻刻文、絵とその解説は、同一画面上で対比しながら見ることができる。また、本文(詞書と絵)の拡大・縮小が自由に行える機能もそなえている。		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4. その他教育活動上特記すべき事項						

